

北海道の名付け親－松浦武四郎に会う

西 川 純 一 *



三重県の松阪市に足を伸ばしたことがある。ここはかつて伊勢神宮に参詣する人々の宿場町として栄えたところであり、古事記の研究で有名な本居宣長を生み出したところである。ついでに牛肉で有名なところでもある。松阪駅前の観光案内所でもらったパンフレットを見ると、郊外に松浦武四郎記念館があると書かれていた。松浦武四郎というと北海道の名付け親として有名ではあるが、私自身はそれ以外のことをあまり知らなかった。せっかくご当地まで来たのだから北海道の名付け親に敬意を表そうと、記念館に立ち寄ることにした。

記念館は三重県松阪市小野江というところにある。ここはもともとは三雲町というところであったが、平成17年1月1日に近隣3町と松阪市に合併したのである。訪ねたのは日曜日の昼頃であったが、客は私ひとりであった。松阪の市街地には観光客が結構いたので、これは郊外にあるという立地のせいであろうか。

最近の博物館、記念館の御多分にもれず、ビデオ素材が多用されていて、全部みると1時間近く要したが武四郎についてひと通り理解することができた。彼は、「旅行家」、「作家」、「出版者」、「学者」の4つの顔を持つ多才な人物として紹介されていた。これによると彼は17歳から全国各地を巡る旅に出て、その後、北方防備の重要性を考えて蝦夷地の調査を志した。28歳で最初の蝦夷地調査を行い、カラフト、千島列島を含め、41歳までに全部で6度の調査を実施した。この時代の調査といえば徒歩が基本であるが、武四郎は諸国遍歴の時代から1日に60キロは歩く健脚家の上に歩きながら記録をつけていく特技があったということである。彼は3回目までの調査を「初航・再航・三航蝦夷日記」としてまとめ出版した。こうした活動が評価され、彼の4回目以降の蝦夷地調査は幕府の御雇として行われた。その後幕府を辞し、それまでの調査を中心に出版活動に専念した。明治政府の成立後、箱館府判事、開拓使判官に就任するがわずかの期間で辞めている。

やはり松浦武四郎といえば、北海道の名付け親ということになるが、これは彼が1869年に「道名の義につ

き意見書」を明治政府に提出したことがきっかけである。この意見書で彼は「北加伊道」など6つの名を候補として提案した。これはアイヌの人たちが互いのことをカイナーと呼ぶことから来ており、「北加伊道」は「北のアイヌ（人間）の国」という意味ということである。明治政府は、この6つの案から「北加伊道」を選び「加伊」を「海」に改めて蝦夷地を北海道と命名したのであった。私ははっきり北海道はその地理的意味合いのみで先に漢字が当てられたのかと思っていたが、もともとはこのような意味を持っていたということは初耳であった。

武四郎の蝦夷地調査の目的のひとつにどこに道路を通すかということがあった。彼は北海道の道路事業の先達でもあったわけで、その調査成果をもとに明治政府に蝦夷地新道開鑿を建白している。彼の蝦夷地調査は依頼を受けたものではなく、個人の使命感に基づいて始めたことである。当初の調査およびその成果の出版が、蝦夷地専門家としての彼の名声を高め、それにより幕府に雇われ、明治政府に出仕することになったと思われる。しかし、彼は働き場所は求めたが、地位に拘泥したわけではなく、いずれの職も比較的に短期間で辞している。彼の理想と相容れなかったのかもしれないが、惜しいところである。

私どもの研究所は4年前に独立行政法人になり、来年また少し組織形態が変わろうとしている。今後の私どもの活動を考えると、松浦武四郎の生き方に学ぶところがあると思う。それは、彼が北海道開発の先人だからというわけではなく、自らの意志で蝦夷地調査を始め、その成果を世に問うてきたという点にある。今後の進路は自ら切り開いて行かなくてはならないということにつながると思うからである。

参考文献

佐江衆一：北海道人 松浦武四郎，新人物往来社，1999年。